

# 香蘭



2018年(平成30年)11月号

第95卷 第11号 通巻1055号



## 香蘭

2018年(平成30年)11月号  
第95巻 第11号 通巻1055号

### 目次

村野次郎作品 私の愛誦歌(39)	伊藤(美)・加納・石井・坪・西野・大井田・伊藤(康)・鈴木(順)・工藤	市川義和	表二
今月の特選			
作品			4
一			2
二			20
三			28
推薦香蘭集			36
香蘭集			37
歌の生まれる場所(71)	藤本佐知子		17
村野次郎への旅(104)	千々和久幸		18
七首抄(九月号)	飯島智恵子		42
エッセイ・自由研究 前田夕暮 人と作品	千々和久幸		44
焦点 点(九月号) 機智と愛嬌のある歌	香山静子		46
作品一特選欄評(九月号)	渡辺礼比子		48
作品一評(九月号)	内藤美也子		50
作品二	朝香ふさ枝		52
作品三	牧田明子		54
香蘭集	柳沼三澤		56
緑地帯	桜井京子		58
明宝研究会第九十八回八月例会	桜井京子		59
歌集管見 長谷川紫穂歌集『うすむらさきの街』評	鈴木桂子		60
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動き			62
他誌拝見 95			63
歌会及び会合・会員消息・他			67
平成三十一年新年歌会 申込書、詠草記入用紙			70
編集後記・新宿日記			
平成三十一年新年歌会のご案内			
表紙絵……香蘭短歌会のマーク「蘭の花」			
目次カット			
和			
田			
和			
表三			

# 吹く風にふふめる雨をふりこぼし

## 重くゆらげらるあぢさゐの花

昭和六年、村野次郎三十七歳の作品である。「あぢさゐの花」と題する十首の作品が並んでおり、この作品はその六首目に置かれている。この十首は何と、すべて結句が「あぢさゐの花」となっている。その年の紫陽花が、よほどきれいで印象深かったのであろうか。いずれにしても、紫陽花への先生の思い入れが強く感じられる。

作品は一試、情景が目に見えるように立ち上がってくる。雨上がりの紫陽花に風が吹いてきて花房を揺らしている。花房は雨による水をたっぷりと含んでおり、その重い花房が風に揺られて水滴がこぼれる場面が映像のように見えてくる。その風景描写に作者の心象も含まれているように思われる。さらに魅力的なのは、調べの良さである。上句の「吹く風にふふめる雨をふりこぼし」に、「F」の音が四個所記されており、その響きが快い調べを作りだしている。

佐藤佐太郎の「あぢさゐの藍のつゆけき花ありぬめばたまの夜あかねさす星」と同様、あぢさゐを詠った歌として忘れられない作品である。  
〔国歌新聞社文庫版「橘風集」76頁、「村野次郎三百首」28頁に所収〕

『橘風集』

# 四選者の作品

「危険な暑さ」 平塚 千々和 久 幸

かくほどに「危険な暑さ」 かくなれば赤信号は無視して渡る暑すぎる夏もきみの言い分も過剰に過ぎてわが意に添わずさあ来いとう気力体力さらになし「危険な暑さ」とは戦わずけつきよくは一首も成らず喫茶店出できつまったく安全な夏せいせいと熊蟬鳴くを耳底に留めいつしか壮年期過ぐミニスカート娘はどこに行つたらう心弱りし日の遠景に

朝日浴び芙蓉の花がほっかりと咲いているなり酔いまだ醒めず口出しをする妻傍にあらざれば昼酒食らい寝てしまいたる

晩 夏 鎌倉 香山 静子

その一生海を知らずにいきいきと目高は泳ぐせまき器にうす紅のネイル丹念に塗りゆけり疾うに若さを無くしたわれがあの人なんか忘れちまつたと言ひながら昔の恋を少し引き摺る枯れ色に変わり果てても鎌上ぐるカマキリのみて夏は過ぎゆく歩廊のわれに寄り来る鳩よ こめんない 今日ばパン屑持っていないくて家持も定家も遠くこの夏の異常な暑さに息ひそめぬる

命かけて為すべきことなどもうあらず自在に生きよう残りの日々を会へばよく戦艦大和を語りぬし九〇代も逝きたるさうな

花 夏 東京 桜井 京子

花夏とふ孫生れてひとつき落書のウサギになりて今朝は届きぬ空港に迎へくられたる子の家族花夏はママに抱かれて眠る子がその子を抱いてあやせる不思議さと柔らかに降る八月のあめペピーカー押ししてじいじが戻り来るあはれと言はな初孫であるじいじでもあはでもよくみどりこは抱き上げられてみんなを聞くみどりこの眠りしあとを庭すみの間より届くこぼろぎのこゑみどりこが泣いて明け方その母がひそけき音にミルクを作る今ころは泣いているかと夫の言ふ花夏は孫なりファットの中に

しもつゆみはり 横浜 渡辺 礼比子

風の日の回転ドアに吹かれ来しプラタナスの葉は回るしかなく過れるはセキレイ、あけは、イトトンボ この内苑に人間くるな捨てきれぬ夢のごとしも蒸し暑き夜空に滲む下つ弓張

ハニーバタートースト食べんこんな暑い朝にはどうでもいいダイエツト

いつしかに価値観ずれし友ふたりプラスチックを話題にしおり北窓を開かば来ずや天折のかの友白き光輝いて

男らは美空ひばりを聴くというオーディオ工場視聴室にてもてなされ送られゆける駅までの木立に鳴けり ああ、秋の虫

# 今月の特選



わたくしが刈ってやらねば庭中の紫陽花カサカサ老醜晒す  
虫だけど名前が凄いヘラクレス自己満足の甲冑重い  
ひと部屋をわたしの世界として籠る最高気温が残暑へ続く  
何ことも御天道様次第です溜らびた葱ひと束下げて

シーツの痕

習志野 石井 雅子

シャンシャンとお誕生日が一緒だと大猫嫌いの夫が言ふなり  
「おんな湯」の暖簾を分けて入りゆくはスポーツジムの更衣室なり  
よるべなく旅ゆくやうな夢だつた シーツの痕のこの右頬  
若者は素直に浮かぶ言葉言ふ紫陽花をみて「淡い性欲」  
わが愛の半分で良いから愛してと昭和の歌手が嘘を歌へり

山藤が揺れてゐたつけ 斎場の窓より見ゆる雑木の崖に  
講談師と行く怪談ツアーなり ランチは鈴ヶ森刑場のそば

かたきの如く

東京 坪 裕

わが脳は常に崩落続きいて一気に崩るるまでが命ぞ

老人の死に場所なるか高速度逃走しちやてまた一人減る

高層のマンションに長く住む人は宇宙遊泳きつとして  
日焼けどめかたきの如く塗り潰し炎暑の街へと出かけて行きぬ

青春はすぐに終わるさ精一杯生きろ鳴けよと八月の蟬

恋人が出来ないらしいいつまでも夜を必死に鳴いている蟬

さるすべり化石のように咲き継ぎて晩夏の街に身を焦がしている

リュウゼツラン 川崎 伊藤 美恵子

わが家にかけてる足場のてっぺんで花火見ている七十九歳の夏

四つ角のリウゼツランが伸びるたび誰か切るなり童の舌の先

ドアごしに声が聞こえる思い出のふるしき包みのほどける声だ

さまざまの夏の花見てあきしころ擬宝珠は白きつぼみもつなり

夏椿はつぼ落ちて死者多き今年の夏をしずめることし

路線バスは大方海をめざすなり海へ海へと伸びゆきし街

あじさいの末枯れし穂が風に折れ転がりゆきて見えなくなりぬ

生活の音 多治見 加納 喜美

連なつて坊ちゃん南瓜が十一個食はずに枯れた炎暑の無情

脚立踏み柱時計のねじを捲く家族で聴いた生活の音

まだまだと思ひ限度と諦める老いの明日は伸び縮みして

十三人の夏 東京 西野 美智代

極刑の終へたる順に(執行)のシール貼りゆく朝のテレビは

十三人の処刑の後に会見の法務大臣の真つ赤なルーージュ

洞窟に十二人の子を支へたるコーチに注ぐ地上の光

洞窟より十三人が救助され十三人が刑死の夏ゆく

五歳児が図鑑のミスに気が付いたホオジロザメはメジロザメだつた

二万余人の帰還叶はぬ浪江町手付かずのまま酷暑過ぎゆく

パーバリーが売れ残り品を処分して四十億円灰になりたり

土色のバツタ 川崎 大井田 啓子

バス停の脇の梅の大樹より蟬の声降る 底なしに降る

土色のバツタが花壇の縁あゆむ晩夏の淡き光を浴びて

公園のつつじの向かう犬と人歩幅見えねど並んで進む

ちから込め雑草抜けば仇討のやうに土くれ足に撥ねくる

人の世にすこし疲れて春の午後こころを込めてトイレ掃除す

十ほどの朝顔フェンスに咲いてをりどの花も皆わたしを見詰む

山椒を食べ尽くしたる青虫は己が終身を夏日にさらす

サマータイム 東京 伊藤 康子

呉に住む隣子ちゃんは無事なるか 西日本豪雨のニュース流るる

大吟醸なる「雨後の月」の届きたり豪雨災害の見舞い送れば

蔵元のファンとなりて復興の一助とならんうましようましと

オリンピックのためのサマータイムなどいらぬオリンピックもいらぬ

幼子を二時間早く目覚めさせ保育所に送り働くんだね

虫の音が聞こえるようになりました メールもらいてなんとなく秋

東京都の最低賃金上がるなら時給アップといつものウワサ

風の舌先

札幌 鈴木 順子

唐突につむじ風あり さり気なくすぐり過ぎる風の舌先

微かなる気配を醸し舞う風に置いてけぼりをまたも食らいぬ

一生は砂時計かも 流れ去る時の速さに気づくは遅し

暗闇をすつぱり切り取り燦めける窓の向こうに私の分身

無理のない歩幅を保ち公園の若葉を鳴らす風と語らう

海鳥は金切り声を浴びせかけ自然破壊の警告発す

塩辛い飛沫を上げて騒ぎおり函館朝市生け簾のイカは

納得ゆかず

東京 工藤 漢子

九十五歳日数にすればどれほどか一日ひと日を積み重ねきて

父母ありて夫と子ありて過ぎし日よ 一人旅立つ運命持ちつつ

終戦の勅語を聞きし二十二歳大きく赤きダリヤ咲きいし

たまきわる命長らえ天皇の終戦記念日の言葉に涙す

思うままなすべきをなす九十五歳こんな私を亡き夫知らず

佐藤愛子の「日日上機嫌」の文読みて納得ゆかず不機嫌になる

哲学的な言葉とも思う「僕ここに」大人になっても「僕ここに」いよ



千々和 久幸

「危険な暑さ」と言わしめた猛暑も異常なら、台風の襲来回数も異常な夏だった。しかし本稿を書いている窓の向こうでは、もうツクツクボウシが鳴いている。記録すくめだった季節も確実に移っていく。

さて1965(昭40)年9月号の先生の巻頭歌は、そんな季節に取材した「街中の蟬」八百であった。

- ①街中になりてのこりしわが庭に今年忘れし蟬の来て鳴く
- ②油蟬炒りつくごとく聞え来て過ぎし記憶を次第にひろぐ
- ③片照りの木に稀に来し街の蟬今年限りの声しほりなく
- ④蟬聞くは今年最後かビル増してみどり失ひゆくこの街に
- ⑤寸土なくビル建ち並ぶこの街にどこに生れし蟬か鳴き澄む

- ⑥この庭木たちていづこに鳴く蟬か木陰も見えず暑き街中
- ⑦蟬の声昨日はききて今日すでに聞きがたき街の夏白みたり
- ⑧居る暑もなき夜のしじま空耳に蟬ありやまず命鳴きつく

先生の生家は旧地名では東京府北多摩郡多磨村上桑屋、現在の府中市白糸台一―十六である。今日と違い往時の生家の辺りは、草深い田圃風景が広がっていたのであろう。東京に居住されるようになってから、先生はしばしばこの古里を遠景にして、東京を歌われている。たとえば次のような歌はわたしの記憶に今も残っている。

東京の庭の木に来て休む鳥鳴く声すれど僅かの間  
この一首は『村野次郎歌集』(昭50)所収の

焦げるほど十分に熱する」とある。珍しい用法だが、東京近郊ではこういう表現は周知のものかも知れない。

③の歌、ここでも「片照り」が難しい。木の片側だけが照っていると字面に添って読めば分かりやすいが、「偏照」だと「日照りばかりが続くこと」(広辞苑)、である。

初句はこれ以上の詮索はせずにおこう。それより「今年限りの」はどうか。これが油蟬の生涯最後の声だから、「声しほりなく」と聞こえるのだろうか。そこに命の儚さ、哀れさに対する先生の思い入れがある。

④の歌、前後するが、これも先生の「角苔が西新宿とかはりたる頃より急に街変貌す」(『角苔』昭50年)に呼応する歌である。

角苔が西新宿と地名が変わり、副都心と呼ばれるようになってから、明宝ビルの周辺はビル街となってしまった。往時は先生のお住まいの周辺にはまだ空地もあり、緑も残っていた。③の「今年限りの」に誘発されて「今年最後」と蟬を前面に出されたものだろう。⑤

の歌、「寸土なく」の「寸土」は「寸土の土地」(広辞苑)で「寸土なく」は「僅かな土地も残さず」ほどの意。

この歌では①から④までの情景を反転させて、この街に生まれた蟬と歌う。それも、「この街のどこに」ではなく、「この街に」「どこに」と滑らかなリズムを切断して駄目押しをする。こんな僅かな思折が広がりを生み、結句も「鳴き澄む」ではなく「鳴き澄む」ともう一押しする。こんなところに先生の工夫が感じられる。

⑥の歌、蟬の鳴き声だけは聞こえているのだが、さて木陰のない街中のどこで鳴いているのか。恐らくは仕事の合間に聞こえてくるのだろうか。発(立)って行った先をさほどに気にしている訳ではない。

だが木陰のない東京の街中では、蟬も難儀をしているのだろう、という趣の歌である。

⑦の歌、季節の移ろいに合わせて蟬の生感も敏感に反応する。昨日まであれほど「炒りつくごとく」声を絞り鳴いていた蟬も、今日は聞きがたくなった。それは「夏白みたり」だから、と季節の推移を結句に纏めた。

「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」(藤原敏行朝臣、秋歌上『古今集』)にある、あの詩人が捉えた季節の移ろいへの鋭敏な感覚である。

歌で、初出は「香蘭」昭和32(1957)年5月号の巻頭歌、「東京の庭」七首のなかの冒頭の歌である。

①の歌を読む時、どうしてもこの歌が重なる。わたしが「香蘭」に入会して間もなくで印象深かったということもあるが、わたしもこの歌に古里を重ねて読んだからである。

先生は少年時代を蟬や小鳥の声の中で過ごされたのだ。この歌、生家に比べれば狭く窄まった東京の庭の佇まいを感しむように、蟬の声を聞いているというのだ。

それにしても「今年忘れし蟬」とは、どういうことだろう。恐らく多忙な先生は、庭に来る蟬の声を聞く暇がなかったのだろう。

②の歌、あの焼け付くように気忙しく鳴く油蟬の声から、先生の少、壮年時代の記憶が次第に蘇ってきたのだ。記憶の具体はないが、様々に交錯する記憶が徐々に浮かれていく様をこう概括されたものだ。

わたしは思わず油蟬の声を「焼け付くように」と書いてしまったが、二句の「炒りつくごとく」も同じ受け止め方ではあるまいか。広辞苑で「炒りつける・煎り付ける」は、「水気のなくなるまで、じつくりいる。」

なおこの場合の「白む」は「①夜が明けてあかるくなる」ではなく、「③衰え弱まる。鈍くなる」(広辞苑)であろう。

③の歌、この一連でも先生は時間の経過に添って対象を歌い納める、というかたちを意識されている。時刻はもう「夜のしじま」である。久し振りに昼間に聞いた蟬の音が、いままも耳の底で鳴き響いているのである。それを「空耳」と表現された。

ただ四、五句の句跨りが、意味を辿って読むと嬉りになろう。

作品一評では染谷慧子同人が村野先生の次の一首を評しているので、左記する。  
生ありてめざむる明日を疑はず闇のまぶたを安らぎて閉す 村野 次郎

しみじみとした境地で、なにか深く心に残る先生の歌である。明日ありと信じて眠る夜のひとときを、私はこの歌を思うのである。

学生時代に大学ノートに書き残いだ日記の表紙に、わたしは「青春の彷徨―譲歩と運定の日日」と上書きして己を責めていた。

当時のわたしは危険な株には手を出さず、第二志望で止める安全運転を旨としていた。